

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者を支援するあなたのための情報紙です。



特集

[仮設住宅発]

新たなご近所づくり

毎週木曜日の午後、宮城県仙台市若林区の仮設住宅集会所前で開かれる「みんなで遊ぼう会」。幼い子ども小学生も一緒に楽しむひととき

特集◎仮設住宅発 新たなご近所づくり

- 愛島東部団地仮設住宅 自治会 (宮城県名取市) 3
- 矢本運動公園仮設住宅 東自治会 (宮城県東松島市) 5
- 浪江町応急仮設住宅 建設技術学院跡地自治会 (福島県二本松市) 7
- ☆専門家に聞く地域づくりのヒント 8

生きがい仕事① Cafe & Bar "Apo" (岩手県大槌町) 9

市民リレー◎東北の元気 ひまわりキッズ 代表 菅原真奈美さん (宮城県岩沼市) 10

場の力◎集いから生まれる活力① 美田園第一仮設住宅・移動販売 (宮城県名取市) 11

インタビュアあの人に会いたい① 雄勝診療所 所長 小倉健一郎さん (宮城県石巻市) 12

全国に避難する被災者への支援 (広島県広島市) 13
・広島市被災者支援ボランティア本部
・コーヒータイム

元気がでるまちづくり① ボランティアグループ「すずの会」 (神奈川県川崎市) 14

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ 15

被災経験のある地域からのメッセージ① 地元の民生委員が仮設住宅の暮らしをサポート

[兵庫県西宮市] 16



特集



仮設住宅発

新たにご近所づくり

自分らしく、楽しく、豊かな暮らしを送りたい。

それは誰もが願うこと。

仮設住宅で自治会を立ち上げ、さまざまな活動をとおして
新たな「ご近所づくり」に励む地域を紹介します。





宮城県
名取市



再生は豊かな交流から 仲間はずれをつくらない

◎宮城県名取市 ^{めてしほ}愛島東部団地仮設住宅 自治会

182戸が暮らす仮設住宅

宮城県名取市にある愛島東部団地仮設住宅には、東日本大震災で被災した同市沿岸部の閉上3丁目や4丁目に住んでいた人たちが、2011年5月末より暮らしている。間取りはすべて2Kに統一されており、同じ地区に住んでいた人たちが暮らせるよう市が割り当てを考へ、現在182戸、380人が住んでいる。一番多い家族構成は、6〜8人で、戸借りている世帯もある。自治会は2011年7月に立ち上がり、役員10人と班長24人という構成で、自治会費として月300円を徴収し、活動費に充てている。

最近になって仮設住宅を離れていく人がいる一方で、賃貸住宅に入っていた人たちが新たに仮設住宅に入居するというケースが出てきている。「見知らぬ土地での賃貸住宅暮らしは、隣近所とあまりうまくいかず、顔見知りの多い仮設住宅へ移ってくるようだ」と、愛島東部団地仮設住宅自治会長の遠藤一雄さんは話す。

親睦を深めるために

愛島東部団地では、大学や支援団体との交流を盛んに図っている。地元しょうがいの尚綱学院大学や、大学コンソーシアムひょうご神戸、京都の西本願寺などからの支援の申し出を受け入れ、お茶会や畑づくり、よさこい祭りチームによる踊りの披露など、ほぼ毎日ならかの催しがある。

もちろん、自治会が主催する行事もある。5月5日には、仮設住宅内外の人たちを集めて宮城県の郷土料理である「芋煮会」を開いた。「仮設住宅に入居している、していないにかかわらず、被災した者同士が当



尚綱学院大学と大学コンソーシアムひょうご神戸による畑づくり

愛島東部団地仮設住宅自治会

会長 遠藤一雄さん

「見知らぬ土地での賃貸住宅暮らしは、隣近所とあまりうまくいかず、見知った人の多い仮設住宅へ移ってくるようだ」



時の気持ちを共有しながら親睦を深めることが目的だった」と遠藤さんは話す。当日は、歌手やパフォーマーをゲストに迎え、食べながら見て楽しみ、交流した。

愛島東部団地仮設住宅ならではの取り組み

愛島東部団地仮設住宅の特徴は、多様な情報発信と、集会所に併設された託児所の存在だ。

情報発信では、一つ目に仮設住宅内の新聞発行があげられる。今まで、10号発行されている。二つ目には、フェイスブックやツイッターなどインターネット上での情報発信サイトを使って、より多くの人たちに、現状を知ってもらえるよう毎日画像つきで発信していることだ。こういった発信作業は、遠藤さんの友人の娘さんがボランティアで担ってくれている。今のネット社会をうまく利用して、周辺の地域だけでなく、日本全国や世界に発信していく現代的な取り組みといえる。

仮設住宅にある託児所

愛島東部団地仮設住宅の託児所は市の直営で、保育士2人が勤務している。利用者は2、3人で、仮設住宅の入居者や近隣に住んでいる人たちの子どもを預かっている。仮設住宅の集会所に託児所があるのは珍しく、「はじめは名取市では、愛島東部と箱塚屋敷の2か所の仮設住宅で試験的に始められ、今では石巻市や仙台市にも託児機能を設けた仮設住宅ができています」と、保育士の一人は話す。

託児所というのは、幼稚園のような教育を提供する場ではないため、何をしたらよいかとても悩んだが、子どもたち主体で自由に遊んでもらい、逆に子どもたちに遊びに誘ってもらう現在のスタイルに落ち着いた。母親たちが一息つく時間をつくったり、悩みを共感したりすることで、子育てへの負担感を少しでも減らせるよう支援しているといい、子どもや母親たちとの交流を大切にしていた。3月からは、箱塚屋敷仮

設住宅の託児所と自治会合同の行事を月1回開いており、先日は食べても害のない「小麦粉粘土」をつくって、各自好きな作品に仕上げた。このイベントは、罹災証明を持つ名取市民なら誰でも参加が可能だ。

愛島東部団地仮設住宅ではさまざまな個人や団体とつながりをもつことで、豊かな交流に結びつき、相互に多くの刺激を受けるきっかけになっている。

「これからも続けて、昔あったような隣近所つながりや希薄化しつつある関係を立て直していきたい」と、自治会長の遠藤さんはとても張り切っている。話のなかで「仲間はずれをつくらない」という言葉が印象的だった。堀



集会所でコンサートを楽しむ住民



託児所の職員と子どものふれあい



宮城県
東松島市



ギネス記録にも挑戦！ 笑顔になるための工夫

◎宮城県東松島市 矢本運動公園仮設住宅 東自治会会

みんなが笑顔になるために

宮城県東松島市にある矢本運動公園仮設住宅は、敷地内で東と西の二つの自治会に分かれている。二つ合わせると400世帯約1150人が生活している。幅広い世代の人たちが住んでおり、入居者の7割は同市大曲浜の住民だ。

「とにかくみんなを笑顔にしたいんだ」。そう話すのは、東自治会長の小野竹一さん。震災後、多くのからの支援や住民同士のかかわりによって、住民に徐々に笑顔が戻ってきた。しかし、年が明けて3月11日が近づいてくると、住民のなかに昨年の暗い気持ちに戻ってきていることを感じたという。みんなとこれから笑顔で過ごし続けたい、そんな気持ちが自治会の背中を押した。笑顔の仕かけづくりが始まった。

ギネスに挑戦！

思い立ったらすぐ行動。やることはお花見に決定！場所は仮設住宅の敷地内にある児童公園。しかし、た

だのお花見じゃつまらない。何かいいアイデアはないかと、昨年の大晦日に年越しそばを持ってきてくれた支援団体に協力を依頼した。その団体とはもともと交流があった訳ではなく、大晦日が初めてのかかわりだったが、お花見企画の協力を快く承諾してくれたという。

そこで出たアイデアが、なんとお花見のなかでギネス記録に挑戦するという実に大きな企画であった。これは盛り上がるだろう、みんなどんな顔をするだろうかと胸が高鳴った。計画は着々と進められていった。

225人の歌のリレー

お花見当日。なんとボランティアだけで100人以上、炊き出しは10団体以上が参加した。炊き出しは団体から無料で行いますとの話があったが、あえて有料にしてもらった。

「これまでたくさんの方に支援してもらって、本当にありがたく感じている。ただいつまでも無料でやっ

「とにかくみんなを笑顔にしたいんだ」



てもらうのではなく、これからは自分たちの力でできることは少しずつやっていかなければ。そう思ってお金をとってくださいとお話しましたんです」

震災から1年が経ち、これから見据え、自立へと向かうための決断だった。

会場の児童公園では、和太鼓の演奏やミュージシャンによるライブ、詩吟と書道のコラボやタレントのベッキーさんのご両親がゲスト出演など、盛りだくさんのイベントが行われた。どこに目を向けても笑い声や笑顔が広がっている。しかし、楽しみはそれだけではない。ギネス挑戦というメインイベントが待っているのだ。

挑戦したのは『123人が輪になって腕を組み、一斉に立ち上がる』『225人で、かえるの歌』を少しずつ歌う』の二つ。始まる前から、みんなどうなるんだろうと期待や緊張が入り混じったこれから起こることへのワクワクが抑えきれない様子で、そのときを待っていたという。

『123人が輪になって

腕を組み、一斉に立ち上がる』は3回挑戦したが、3回とも失敗。少人数でも難しいこの挑戦、そこに大人数ということもあって力加減やバランスをとるのが難しくなったようだ。しかし、そんな場にも笑いが生まれた。

「あああ、難しいこと」「なんだい、うまくいくと思ったのに転んでしまったわあ」。近くにいる者同士が笑いながら声をかけ合い、笑い合っているうちにその笑いが広がって大笑いとなった。顔をくしゃくしゃにして笑う人、手を叩いて笑う人。失敗も笑いなのだ。

『225人で、かえるの歌』を少しずつ歌う』は、15人が一組になり、15分割されたかえるの歌を1人ずつ次々と歌っていくことを繰り返すものであったが、これは見事成功。それぞれが自分が歌う番号のカードを持って並び、自分の順番を待つ。最後の人が歌うまで成功するかどうかかわらない、歌う瞬間、そして最後の人が歌うのを見守るまでの間、みんな手に汗握

る思いだったのではないだろうか。全員が歌い終わると参加者だけでなく、その場にいた全員が大喝采。まさにみんなが一つになった瞬間であった。

小野さんは今回のお花見についてこうも話す。

「みんなと笑顔でい続けたい、そういう思いが強かったが、それだけが狙いではない。仮設には部屋に閉じこもってなかなか外に出て来ない人もいる。一度に多くの人が参加して、みんな楽しんでる花見にしたかったんだ」

その言葉どおり、多くの人たちでにぎわったお花見は、参加した人たちすべての心に残るものになった。

みんなでつくりあげる

ほかにもある。矢本運動公園仮設住宅では、昨年のクリスマスは3週にわたってクリスマスパーティーを行ったという。このクリ

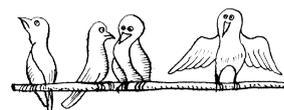


出店も盛況

スマスパーティには、約300〜400人が参加したというから規模の大きさに驚く。今年8月の夏祭りには、なんと青森からねぶたがやってきた。

「一人の力ではなく、みんなで作ってあげているんです」

住民や支援団体、地域、すべての力でつくりあげられる矢本運動公園仮設住宅自治会の活動は、東松島市だけにとどまらず、多くの人たちに笑顔を広げている。



おすそ分けは日常茶飯事

二本松市での暮らしを楽しむ

◎福島県二本松市 浪江町応急仮設住宅 建設技術学院跡地自治会

浪江町民26世帯が喜ぶ

福島県二本松市には、原発事故で避難区域となった福島県浪江町民が暮らす仮設住宅団地が11か所ある。その一つ、建設技術学院跡地仮設住宅には26世帯、48人が暮らす。

敷地内は、入居者が手づくりしたという木材のオブジェや花々があふれ、東屋のベンチでくつろぐ人たちの姿、集会所からは元気な歌声が響いていた。ペットとの同居が可能な住宅のため、ペットも多い。

入居者のほとんどが75歳以上の高齢者だが、誰かが「カラオケ大会をしよう」と呼びかけると、翌日には大会が開かれるという。しかも、終了後には、お手製のおかずやお酒を持参し、二次会と称するおしゃべり会が開かれるのが恒例だ。スウェーデンハウス施工の仮設住宅は、実用的で見た目もあたたかく、これまで雪の降らない地域で暮らしてきた浪江町民にとって、初めて雪かきを経験した昨冬の寒さへの大きな味方となった。

自治会長の鎌田優さんは、「規模の小さな仮設住宅だから、おかずのおすそ分けは日常茶飯事だし、料理やお酒の好きな人が多くて集まる機会が多いから、自然と見守りにつながっている。入居者が少ないため、雪が降れば、いやでも雪かきに参加しないといけない面もあるが、それが自治会としてのまとまりにつながっている」と話す。そして、「サポートセンターなどの訪問員が戸別訪問に来るけれど、誰も家にいなくて、集会所にいるということが多い」と笑う。

「お互いが面倒を見合っている。少人数だからできることかな」（鎌田さん）。

地域との垣根のない場所

建設技術学院跡地仮設住宅への入居が始まったのは2011年8月。その後、



手製オブジェに花を飾って



集会所に飾られた手芸クラブの作品たち



増築した集会所



自治会長の鎌田優さん（左）と奥様のキヌさん

町の指導で自治会を立ち上げることにになり、同年10月29日に初めて一堂に会し、東北の秋の恒例行事「芋煮会」を楽しんだのだが、同じ浪江町民とはいえ初めて会う人ばかりで、参加者の表情は暗かった。

翌日に自治会を発足させ、鎌田さんは活気と呼び込もうと、近隣の駐在所に呼びかけて交通安全講話と、懇親会を行った。これをきっかけに、徐々に絵手紙教室や手芸クラブ、フラダンス、入居者が講師役を務めるカラオケ教室や、尺八とケーナ演奏教室などが主体的に定期開催されるようになった。狭かった集会所は6畳分増築して48人全員が入れるようになり、忘年会ではみんなの明るい笑顔がみられた。

人気のカラオケ教室には、毎回12〜13人の参加があり、仮設住宅の人だけでなく、地元の人たちも参加する。「ここは垣根のない場所だからね。地元のお祭りにも参加するし、子どもたちが豆まきに来てくれたりと、交流がうれしい」「浪江町は相馬藩6万石の趣ある城下町だけど、ここは鬼ババの逸話が残る民話の里なんだ」と語る鎌田さん。二本松市での暮らしを楽しみながら、しかし、故郷への思いは強い。「目が黒いうちに浪江に帰れるなら、全員で帰ろう」といつも語り合っている。「4月に仮設住宅の自治会長会が発足し、早速浪江町を視察に行ったが、放射性物質の置き場になっていて、除染作業の様子は見せてもらえなかった」

小

いまでは入居者同士、「打てば響く関係」（鎌田さん）に深まった。故郷への思いをにじませながら、「ここにはもう絆がある。26世帯全員で復興住宅に入りたい」というのが今の鎌田さんの願いだ。

専門家に聞く地域づくりのヒント!

来たるべき住み替え時までを視野に入れた支援を!



神戸学院大学総合リハビリテーション学部 教授

藤井 博志(ふじい・ひろし)

兵庫県社会福祉協議会(地域福祉部長)、大阪府立大学社会福祉学部(専任講師)を経て現職。住民による福祉活動、地域ケア、地域福祉計画などを、現場と共同で研究。阪神・淡路大震災での支援経験を活かし、2011年度より宮城県被災者支援従事者研修の講師を務め、公式テキストの作成にも携わる。

応急仮設住宅は、たとえ一時的な仮住まいであろうとも、そこでの「生活の営み」は一人ひとりのまぎれもない人生です。そして、このような状況だからこそ、暮らしや人生を築くための「時と場」が必要なのです。この「地域支え合い情報」創刊号で紹介した3つの仮設住宅の自治会とリーダーは、そのような時と場をつくり出しています。

①仮設住宅外との交流がうまい!

愛島東部自治会は、仮設住宅外との交流がうまい! 地域とは家と外を結ぶ媒介ともいえるわけですが、大学、活動団体との交流、インターネット活用で外への発信を行い、「仮設住宅を開く」ことで住民の生活を豊かにしているといえるでしょう。

②行事がうまい!

矢本運動公園仮設住宅東自治会は、行事がうまい! 地域力の1つは行事力です。行事とおしての共同作業と楽しさが地域での支え合う基盤をつくります。あるリーダーはまちづくりに「感動」が必要だと言いました。まさに、ここでの行事は「感動」が仕かけられています。

③仲間づくりがうまい!

浪江町応急仮設住宅建設技術学院跡地自治会は、その

小規模さを活かした仲間づくりがうまい! 原発事故による避難という特殊な事情のなかで、故郷への思いを居住者の絆にしていく様子が伝わってきます。

このような交流活動をとおして良好な地域コミュニケーションができると、住民同士の気づかいや心配のし合いが生まれます。これが支え合いや見守り合いにつながるのです。住民同士の関係においては「支える」「見守る」という一方方向ではなく、「支え合い」「見守り合い」という対等な双方向の関係こそが大切です。そこから、ここに居てもかまわない(存在承認)、ここに居てくれないと困る(役割創造)という居場所が生まれ、人を元気にしていくのです。

このような地域土壌をつくるには、今回紹介した3つの事例のように優れたリーダーと自主的な自治会活動が必要なのですが、さらに、そのリーダーや活動を支える専門職の存在が大切です。生活支援相談員等の支援員(サポーター)は、リーダーを支えつつ協働しながら、住民同士の仲間づくりを支援することが求められます。それが生活支援の基盤ともなり、また、来たるべき住み替え時に、被災者自身が新たな生活を築いていく支援にもつながるのです。



岩手県
大槌町

人が集まり、 話せる場所をつくりたい

岩手県大槌町 Café & Bar “Ape”

津波の傷跡がいまだに残っている吉里吉里の海岸沿いに、カフェバー“Ape”はある。オーナー大須賀一成さん、ノリシゲさん兄弟は、「何かこの場所に、人が集まり話せる場所をつくりたい」という思いで、このカフェを建てた。

被災した家のパーツを活かし、手づくりで建てた“Ape”は、生活感や愛着あふれる建物になった。内装を見てなつかしく思う人も多く、カフェに立ち寄った人同士で、自然と会話が始まる。友人と気軽に集える場所がない大槌町では貴重な空間である。

お昼時には、震災前から

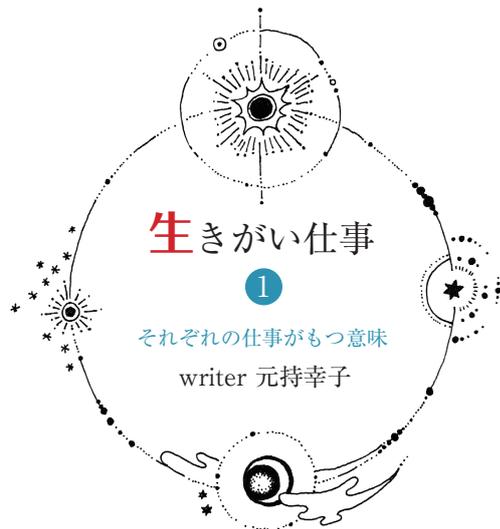
の味を引き継ぐラーメンやおふくろの味の団子など、おいしさとなつかしさも提供していて、地元の人やボランティアに来ている県外の人たちにも人気だ。

午後 ゆったりとした時間には、クラフトの教室やミニセミナーなどに参加する女性たちが多く集まり、挽きたてのコーヒーを味わい、会話を楽しむ。震災の話は尽きないが、それぞれに新たな出逢いや発見ができ、満ち足りた笑顔で帰っていく。

夜になると、津波で流された真つ暗闇の大槌町に、カフェが明かりを灯す。その明かりを目指すかの

ように、日中仕事をしている若者や音楽好きな人たちが集まって来る。音楽を聞いて楽しんだり、友人たちと語り合える居心地のよい空間は、被災地・大槌にとっても貴重である。

ミュージシャンの弟ノリシゲさんと奥さんのリアさんが奏でる音楽が人々を魅了し、勇気づけている。ライブのある日はお客さんで満員となる。震災後につくった曲「歩きましょう」は、復興に向け一歩一歩を進んでいく姿とともに、このカフェに集まる地域の活力の原点を表現しているようだ。



生きがい仕事

1

それぞれの仕事がつもつ意味

writer 元持幸子



木のぬくもりが温かい店内。
カウンターでの話らいも楽しい



Cafe & Bar “Ape”

岩手県大槌町吉里吉里 2-6-18

<http://ria-lism.com/kirikiri-genki/>



宮城県
岩沼市



市民リレー

東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。



今回は...

ひまわりキッズ 代表

菅原 真奈美さん

◎宮城県岩沼市



宮城県岩沼市の応急仮設住宅に住む菅原真奈美さんは、小学2年生と幼稚園児を育てる2児の母。昨夏、仮設住宅に入居したものの、長引いた避難生活と新たな仮設住宅暮らしでストレスを感じている子どもたちの存在が気になった。

子どもたちが自由に遊べる場が必要だと考え、昨年4月から遊び場づくりを模索。さまざまな意見をもつ住民や集会所の利用方法の間で揺れながらも、2012年2月に母親3人と子どもたち、ボランティアとともにサークル「ひまわりキッズ」を立ち上げた。

月1回、親子料理教室や七夕飾りづくりなど、テーマを決めて活動しており、お昼にはホテル仙台プラザの元シェフで、あひのがま相野釜地区在住の佐々木五十美さんによるおいしい料理に舌鼓をうつのが恒例だ。

今回は、西集会所を借りて、工作やぬりえを楽しみ、佐々木さんお手製のお好み焼きを囲んだ。「佐々木さんの料理は、い

つも子どもたちを笑顔にしてくれそうです」と話す菅原さん。この日は口コミで近隣から参加してきた小学生もいて、20人ほどが入れ替わり立ち代わり「自分の時間」を満喫した。

「準備はたいへんです。子どもたちから『楽しかった』『次は何をするの?』と聞かれるとうれしいし、やりがいがあります。活動を支えてくださるボランティアや周りの人たちに感謝します。集団移転を希望する人、しない人、それぞれ事情がありますが、不安な気持ちやなくなるように、一日一日を大切に過ごしたいと思います。子どもたちの成長を見守りながら、続けられる限り活動をしていきたいと思

小



子どもたちと一緒に切り絵を楽しむ代表の菅原真奈美さん

場の力 ① 集いから生まれる活力



宮城県
名取市

宮城県名取市◎美田園第一仮設住宅・移動販売

「渡邊さん、もうすぐ来るよ」
その声で人だかりができる。
人だからから
笑顔があふれる。

移動販売車が到着するまでの
ほんの小さな時間。

毎週月曜日は
家事を楽して

井戸端会議。

移動販売車が

美田園第一仮設住宅に
やってくる。

● ● ●
お惣菜を待っている人が
自分のお惣菜を待っている人が
自分のお惣菜を待っている人が



店主の渡邊あや子さん



「どれにしようかしら…」と品定め中



移動販売車が来る時間になると、自然と人が集まり井戸端会議



手づくりのお惣菜はすべて100円



あっという間に人だかり

渡邊あや子さんと美田園第一仮設住宅の住民との関係は震災以前にさかのぼる。渡邊さんは、趣味の家庭菜園でつくった野菜や惣菜を、閑上地区で移動販売していたが、震災後はお客さんの行方がわからなくなり、自身も被災したため、移動販売を一時中止していた。

しかし、偶然、お客さんと再会。「また、渡邊さんの惣菜が食べたい」「仮設住宅に売りに来てよ」の声に後押しされて再開することにしたのだ。

それは、震災以後、元気の出なかつた自分の生きがいづくりにもつながった。「仮設住宅に入った人を元気づけようと始めたのに、逆に元気をもらいに来ている」と渡邊さん。「仮設住宅で販売をすることで、バラバラになつてきた多くの常連さんと再会することができました」

移動販売車は、震災前つながりを取り戻してくれただけでなく、新しいつながりも生みだしている。

竹



「ちよつと気になる人と一緒に」から始まる地域の支え合い

1995年、在宅介護を終えた鈴木恵子さんは、それまで支えてくれた5人のPTA仲間とともに神奈川県川崎市宮前区野川地区でボランティアグループ「すずの会」を立ち上げた。活動の趣旨は、高齢者や障害者とその家族を支え合い、ふれあいながら誰にもやさしいまちづくりを目指して、地域のニーズに合った活動を行っていくというもの。高齢者や介護者のサポートに始まり、集いの場づくり、情報提供、地域ネットワークへと、住民主体の活動の輪を広げている。

ちよつと気になる人と一緒に

多岐にわたるすずの会の活動の一つに、ご近所単位でおつきあいの輪を広げるお茶会「ダイヤモンドクラブ」がある。



毎週のようにお茶会が開かれる平井さん宅。世間話からミニ介護講座になることも……

ダイヤモンドクラブは、地域で孤立しがちな高齢者、障害のある人、介護者、子育て中の母親など、ちよつと気になる人と一緒にお茶会をするというのがルールだ。1回の参加費は一人100円。開催者には川崎市からの助成金が1回3000円出る仕組み。個人宅での開催が多く、10人程度が、気になる人を真ん中にご近所で集まる。認知症のひとり暮らしの人を見守るもの、介護保険に結びつかない人を支えるもの、親の介護をするシングル息子・娘が孤立しないようつながるものなど多彩である。近隣で負担にならない程度に集い、挨拶し

合う関係ができることで日常の見守り関係が成立する。

隣近所の手助け

このダイヤモンドクラブをとおして、特別養護老人ホームに入所していた夫を自宅へ連れ帰ったのが平井セツ子さんだ。

平井さんは、すずの会の支援を受けながら夫を在宅で介護している伴さんとダイヤモンドクラブで知り合った。

すずの会の細やかな支援を知り、平井さんは夫を自宅に連れて帰ることを決意。平井さんの自宅にはすずの会のメンバーや近所の人たちが頻繁に出入りしている。

ダイヤモンドクラブは、代表の鈴木さん自身がケガをしたときに感じた「隣近所のちよつとした手助けがあれば」という思いから生まれた。制度による支援でなくても、世話をする相手がいることやちよつとしたお手伝いをしてもらえたことで、さまざまな問題が解決され

ていった体験がダイヤモンドクラブにつながったのだ。

世話焼きさんは生活のプロ

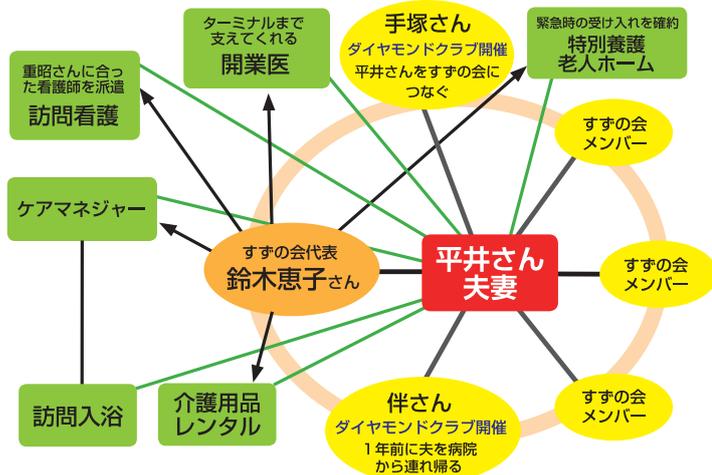
ダイヤモンドクラブに地域包括支援センターなどの専門職が参加することがある。「専門職は専門知識をもっている人だけれど、その人の生活についてすべてを知っているわけではない。専門職がかかわる領域は生活全体の一部」と鈴木さんは言う。

鈴木さんが言う。専門職が専門領域のプロであるならば、住民である世話焼きさんは、生活のプロでなくては、と鈴木さんは考

えている。「すずの会」は拠点となる場所をもっておらず、法人格も取得していない。代表の鈴木さんは、地域住民の活動であ

るからこそ、ネットワークを構築しやすく、専門機関への働きかけが容易だと考えているのだ。鈴木さんは「困っている人を支える資源は無尽蔵にあるはず」という。その資源を見つけてネットワークをつくり、必要に応じて活用しているのが「すずの会」の特色であり、行政、専門職の力を引き出す「住民力」となっている。管

図 平井さんを住民と専門職で支え合っている



被災者の生活を支える支援員をフォローする機関
【宮城県サポートセンター支援事務所】の取り組み

宮城県サポートセンター支援事務所
〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4
宮城県社会福祉会館 3階
TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601



研修のひとつ

仮設住宅が震災前に住んでいたまちから遠く離れた場所に設置され、地域とのつながりが断ち切られて、それぞれの居住区で孤立を招いている現実があります。被災前と同じ住まいにいる被災者も、周辺の激変や近隣者の喪失など、地域や暮らしに課題を抱

えています。重要なのは、被災者が孤立しないつながりづくりと、そのつながりのなかで個人の生活再建を支援することです。

宮城県内の被災地の市町では、被災者の生活を支援するために、以下のような各種支援員を設置して、戸別訪問や相談事業などを行っています。支援員の多くも被災者であり、宮城県が設置した「宮城県サポートセンター支援事務所」が、各市町を直接訪問したり、これら支援員対象の研修会を開くなどサポートしています。

- ・サポートセンターに配置されるライフサポートアドバイザー（LSA・生活援助員など）
- ・市町社会福祉協議会に配置される生活支援相談員、復興支援コーディネーター
- ・友愛訪問員（気仙沼市）
- ・仮設住宅団地生活相談員など（南三陸町）
- ・訪問支援員など（石巻市）
- ・絆支援員（仙台市）

現場で個々に奮戦する支援員へのフォローアップも大きな課題となっており、2011年7～8月にはスーパーバイザー研修を開催し、好評でした。また、弁護士や司法書士、社会福祉士などが仮設住宅に向向って相談会を開いたり、市町ごとに担当の弁護士が相談にあたる体制づくりも進んでいます。

「専門性のある人たちがそれぞれの専門性を活かして、かゆいところに手の届く支援をしたい」と所長の鈴木守幸さんは話します。

今後は、仮設住宅後を意識した地域での生活再建や自立に向けた支援の継続が求められ、仮設住宅から復興住宅に移行しても支援は続きます。



鈴木守幸所長

サポーター
支援員のお仕事

支援員の役割は訪問活動等とおして被災者の生活課題や福祉課題を把握し、支援を必要とする人が、必要なサービスを利用できるような相談や調整、つなぎを行うことです（個別支援）。さらに、交流活動等を活発にし、被災者の生きがいや豊かな人間関係を生み出す支援を行います（地域支援）。

このような活動により、被災者一人ひとりの生活意欲を引き出し、生活再建・復興の取り組みをサポートすることが目標です。

見守り、訪問活動…安否確認やニーズ把握

個別の生活支援、住民の役割・生きがいづくり

住民交流活動…居場所づくり・コミュニティづくり支援

支援者間（関係機関）の調整と支援…連絡会議

平成24年度 宮城県被災者支援従事者研修 研修体系



◎ステップアップ研修 I【基礎研修受講者向けの研修】

- 【仙台研修】 日時：9月27日(木)～28日(金)
会場：茂庭荘
- 【気仙沼研修】 日時：10月4日(木)～5日(金)
会場：平成の森 [南三陸町]
- 【石巻研修①】 日時：10月18日(木)～19日(金)
会場：石巻市ささえあい総括センター
- 【石巻研修②】 日時：10月30日(火)～31日(水)
会場：石巻市ささえあい総括センター

MESSAGE

サポーターのあなたへ！

日々、被災した方々に向き合い、
寄り添った支援をされているあなたへ。

発災から1年半が過ぎ、支援員（サポーター）の仕事も1年が過ぎようとしていますね。

多くの人たちが、あなたの訪問で癒され心強く思っていることでしょう。ときには、心が折れそうになることもあることと思います。あなたは今、どんな気持ちで仕事に携わっておられるのでしょうか？

被災した人たちの生活は、表面的には落ち着いた状態にあるとみられますが、長引く不自由な暮らしのなかで多くのストレ

スを抱えたり、住まいや経済的な見通しの立たないことで、将来への不安を抱えている人も多く聞いています。また、被災状況や仕事、住まいの再建状況などの違いにより、同じ住民同士でも意識の格差が生じているとも聞いています。

サポーターのあなたの健康や心の疲れも気になります。どうか、ひとりで悩みや課題を抱え込まないで、仲間とあるいは誰かと共有し、分かち合って元気で支援活動に精励されることを心から願っています。



宮城県サポートセンター支援事務所アドバイザー 浜上 章

鳥取県生まれ。兵庫県、大阪府の社会福祉協議会で地域福祉活動推進支援に携わる。気仙沼市社協災害ボランティアセンター支援に関わったことが縁で、2012年4月より宮城県サポートセンター支援事務所アドバイザーとして、サポーターの研修等支援にあたっている。

被災経験のある地域からのメッセージ



地元の民生委員が 仮設住宅の暮らしをサポート

兵庫県西宮市



赤石貞子さんは、阪神・淡路大震災時に兵庫県西宮市の仮設住宅に設置された「ふれあいセンター」を運営する一員として、住民の交流や孤立防止に取り組んできた民生委員です。「仮設住宅の支援についてのマニュアルなど何もありませんし、住民とともに命を守り、生活のしづらさを克服するために、ただひたすら手探りで活動した4年半でした」と当時を振り返ります。

新興住宅地に

できた仮設住宅

兵庫県西宮市東山台地区は、西宮名塩^{なじお}ニュータウンとして1990年に分譲が開始された新興住宅地で、まだ自治会組織などが整備されない1995年1月に震災が発生しました。中学校建設予定地を中心に仮設住宅が426戸建設され、



赤石貞子さん

西宮市から届いた仮設入居者のマップをもとに、5月から戸別訪問を開始しました。最初は扉をなかなか開けてもらえませんでした。が、回数を重ねるうちに、少しずつ扉が開き、訪問するのを待ってくれる人も出てきました。

8月からは仮設住宅専任担当民生委員になり、自主的に応援してくれるもう一人の民生委員とともに4年半の活動を行いました。

入居者主体の

「ふれあいセンター」

仮設住宅のなかに、住民たちが気軽に集える場として期待していた「ふれあい

センター」が9月にオープンしましたが、開館日が月・水・金曜日の10時から16時という住民の期待を大きくはずれたものでした。そんなとき、地元の小学生が書いた「命大切や、大人も子どもも家族も」という文章がきっかけになって、「仮設の命は仮設で守ろう」という動きが始まり、入居者の自治組織「名塩仮設住宅連絡協議会」が発足しました。連絡協議会がふれあいセンターの運営に参画することで、住民の意向が反映されるようになり、毎日利用が可能となりました。

ふれあいセンターでの活動

ふれあいセンターを入居者が当番制で管理するようになり、センターを拠点にして、さまざまな活動が展開されました。有料バザーは自力復興のために、もらいグセをつけず、おごらず、誇りをもって生きていこうというので始めました。バザーの収益金の一部を利用して、温泉にも行きました。また、アルコール依存症

を患う入居者を講師に招いて折り紙教室を開き、日々見守りながら暮らしを支えることもできました。

短い年月であっても 思い出の地にしたい

さまざまな活動をとおして、ふれあいセンターは住民の情報交換と、深刻な健康状態や家族問題などの予防、交流の場となり、自然なコミュニケーションができあがりました。仮設住宅で知り合った人たちがまとまってグループをつくり、復興住宅への移行がスムーズにいったのは住民同士のコミュニケーションが図られていた成果だと思っています。

1999年3月28日、仮設住宅の同窓会とふれあいセンターの閉所式が行われました。仮設住宅期の人たちがその後もつながっている事実は、寄り添ってともに考える信頼関係が構築された証です。

「短いつきあいであつても思い出の地にしたい」というみんなの思いは、記念植樹となって西宮市名塩に今も残っています。竹

購読者を募集します

☆次号予告 特集「子どもを育む地域の間」新連載「まちの仕組み」① 女川町の被災者支援

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか？ お知り合いの方へのプレゼントにもご利用ください。

- 購読会員 年3,600円(年12回、送料込み)
- 支援会員 1口3,600円(年12回、送料込み)
- ご指定いただいた先へ、それぞれ年12回お送りします。指定がない場合は、編集部が選定する被災都道府県・市町村の被災者の生活支援担当課、または社会福祉協議会のほか、全国に避難する被災者を支援する都道府県、市町村の被災者の生活支援課または社会福祉協議会に送付いたします。

購読ご希望の方は下記口座へお振込ください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

<お振込先> ●ゆうちょ銀行振替口座
口座番号：02260-9-46303
加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、①お届け先の住所と、支援会員の方は②希望する送付先の宛名、または③「指定なし」と記入してください。

編集後記 ☆地域で輝いている人たちの笑顔や思いを紙面でお届けしていきます(菅原) ★ニュースにならないような小さな出来事・組織が復興の力に！(竹内) ☆被災地で暮らしを豊かにしよう！と奮戦する人びとをご紹介します(小野寺)

本誌がホームページでも読めます！